



谷中川柳大会実行委員会
台東川柳人連盟

谷中川柳大会

2024



共催・谷中コミュニティ委員会・上野桜木町会
後援・台東区教育委員会・下谷観光連盟・川柳文化振興会・川柳マガジン



〔協賛御礼〕 敬称略

阿部建築・和泉石材
 いせ辰・上野桜木町会
 上野川柳会・越後屋
 勝太郎・金吉園
 下谷観光連盟
 スワン社・千駄木腰塚
 川柳文化振興会
 川柳マガジン
 一寸亭・坪井建築
 鳥越神社・中野屋
 日本美術商事
 乃池・花重
 原田建設不動産
 ひみつ堂・
 谷中ぎんざ商店街
 谷中せんべい
 谷中田美術
 よみせ通り商業会
 龍泉寺・和栗や



もくじ

主催者挨拶	浅尾 空人	1
主催者挨拶	土居 利光	2
主催者挨拶	鏑木 啓磨	3
ご祝辞	辻 清人	4
ご祝辞	保坂まさひろ	5
ご祝辞	高森喜美子	6
ご祝辞	小坂よしひさ	7
ご祝辞	中村謙治郎	8
谷中川柳大会概要		9
一般の部 受賞句・入選句		10
ジュニアの部 受賞句・入選句		15
選者感想	末廣照純、矢部直意、堀井重義 松田正昭、小西祐一、橋本弘正 岸信正、原田仁教、松尾仙影 小杉美智子、石井和子、木村成子 土居利光、尾藤川柳	19
披講・表彰式		29
谷中川柳大会を終えて	保坂 三蔵	34
あとがき	芹澤 幸雄	35
協賛地図		36

いじめごやし

谷中川柳大会実行委員長

浅尾 空人



こんにちは。ようこそいらつしやいました。
昨年第二回の谷中川柳大会を開催することができました。

それは、川柳というものが台東区蔵前という所で今から二六〇年前に誕生をことを広く知って頂きたいということでの会を開きました。
した。

地元の皆さんはもちろんでございますが、谷中小学校、上野中学校の皆さんにも参加していただき一回目は大きな成功を収めました。

今年の第二回目は、忍岡小学校、根岸小学校、上野高校も加わって頂き、昨年よりもずっと投稿が増えました。ありがとうございます。

これからも3回、5回、10回と続けていきたいと思えます。その時には是非ともよろしくお願いたします。



入選した方々、おめでとうございます。

歳をとってくると物忘れが激しくなってます。朝やって夕方日記に付けようと思うと、もう忘れてしまっていることも多くなりました。

人間は、考えることがすごく大事です。考えるというのは、ただモノを見るだけではなく、何でか…、と考えることが大切だと思います。

私はパンダにかかわって10年以上なりましたが、パンダってみんな「かわいい」っておっしゃるんですね。反対だという方がいてもいいのですが、何でかわいいのだと思います？

もしパンダが何でかわいいんだと聞かれた時、自分だったらどうこたえようかと考えることが大切です。そういう意味では、川柳は五七五の中に、最初の句と最後の句を繋ぎ合わせる中に違ふことを繋ぎ合わせる。笑いとよく言いますが、硬直した事を打破するような、簡単に言うると凝り固まったようなことをポンポンと叩くようなことです。

是非これからも川柳を楽しんで頂ければと思います。

今日は本当におめでとうございます。



主催者挨拶

台東川柳人連盟理事長・鳥越神社宮司

鍋木 啓磨



本日これより披講がございしますが、受賞された皆さん、おめでとございます。

先ほどのお話にもあったように蔵前で川柳発祥ということがあり、いまの「新堀通り」のところに三桂町会があり、そこに「川柳発祥の地」碑と
いうのが建っております。興味ある方は、ぜひご覧ください。

発祥という事は大事な事で、江戸時代からずっと続いてきている川柳でございます。全国へ広がっておりますが、この伝統を継承する意味でジュニアの方々が多く参加されたことを嬉しく思っております。

本日は勤労感謝の日で、全国の神社で新嘗祭というものが行われています。天孫降臨の折に天照大神がニニギノミコトに稲穂を持たして居りてきました。その稲穂の種が全国に行き渡り、稲作が全国に広がったという事です。

ここにおいでのお客様、ジュニアの皆さんが、小さな種になりまして、この川柳が無事また次の世に伝わりますように願ひまして、挨拶の言葉にいたします。

祝辞

衆議院議員

辻 清人



第二回谷中川柳大会の開催、誠におめでとうございます。

台東区は川柳発祥の地であり、私が住んでいる蔵前は、まさに「川柳発祥の地」で、その記念碑がある事から日頃より深い縁を感じてきました。

二回目が開催された本大会は、二六〇年以上続く川柳文化の継承に繋がるものです。地域の皆様とともに、全国から投句された幅広い世代の方々に我が国の伝統文化に親しんで頂ける、大変意義深い機会であったと思います。

わずか十七音の五七五のリズムですが、人情をよみ、人や社会を風刺する口語の詩である川柳は、このストレスの多い現代社会において、人々の心を豊かにしてくれるものであると考えます。

この大会を契機に、川柳文化が台東区から国内外に一層の発展をされますことを切に願うと同時に、ご参加の皆様、大会関係者の皆様のご健勝をご祈念いたしまして挨拶とさせていただきます。

祝辞

東京都議会議員

保坂まさひろ



こんにちは。地元谷中選出の都議会議員です。常日ごと地域の皆様には、あらゆる方面でお世話に舞っております。

今年も二回目となる素晴らしい企画を作りいただきました事嬉しく存じます。台東区が川柳発祥の地ですが、その大切な史料が谷中のお寺さんに眠っているということで、谷中にも大変ゆかりのある川柳。これを結び付けない手はないという事でこうした素晴らしい企画を作って頂き感謝申し上げます。

私の息子も地元の小学生で、川柳の課題を頂いて風呂のなかで一生懸命考えておりました。一人でああでもない、こうでもないかと親に相談することもなく考えていました。川柳に触れることで、新聞を読んだり、社会を考えたりする表現として面白おかしく捉える、これは川柳という文化ではないかなと思っております。これを台東区のみ、谷中のみならず、谷中から日本中に発信してもらいたいと思っております。

今では世界、例えばロサンゼルスから日本の大会に日系の方が参加しているなどの現実があります。谷中から世界に繋がり、これこそ台東区の持ち味ではないかと思えます。

川柳先生や地元の浅尾会長、土居会長らを柱に皆さんと一緒に地元の文化を育てていければ、また実りある川柳の文化を台東区で作っていければと思っております。

本日はおめでとうございます。

祝辞

台東区議会議員

高森 喜美子



みなさま、こんにちは。

本日は、第二回谷中川柳大会の受賞された皆様、誠におめでとうございませう。また開催にあたりましてご尽力いただきました谷中川柳大会実行委員会浅尾会長、そして台東川柳人連盟鏑木会長をはじめ関係の皆様、厚く御礼を申し上げます。

第二回川柳大会は5400余句の投句があつたと伺つております。

一句一句に込められた熱意と創作性豊かな作品に敬意を表する次第であります。

日本の文化の一端を担う川柳は、その独特のコトバとリズム、そしてまたその表現は、私たちの日常生活の中に溶け込み、奥深さを与えてくれていると思つております。

今後共江戸から江戸から続く文化を継承していただきますよう、お願いを申し上げます。

とともに、本日受賞されました皆様の今後の益々の御活躍と、ご臨席の皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

本日はおめでとございます。

祝辞

台東区議会副議長

小坂よしひさ



みなさま、こんにちは。

本日は第二回谷中川柳大会の開
催、誠におめでとうございませ
う。数多くの作品から受賞された皆

様、本当におめでとうございませ
う。

先ほど来から台東区が川柳発祥の地
ということでございます。ので、私
もこの伝統文芸である川柳につい
て今後しっかりと研鑽を
してまいりたいと、今日、決意さ
せていただきました。

台東区における川柳文化の益々の
発展と、本日も来会の皆様
のご健勝をお祈り申し上げます。

本日はおめでとうございませ
う。



祝辞

台東区議会議員 中村 謙治郎



地元の台東区議会議員、中村謙二郎でございます。本日は、第二回谷中川柳大会の開催、ほんとうにおめでとうございます。

今日も多くの方がこの場所に集い、伝統文化である川柳を楽しんで継承していく場が設けられているという事は、誠に発祥の地である台東区にとっても大変意義深いことだと思っております。

川柳発祥の地として知られる台東区で、このような大会が開催されたことは、文化の振興に大きく貢献したものと言えます。

今回も地域の子供たちが、多くの作品を思いのままに綴って応募されたでしょう。伝統文化を継承するという思いをもった実行委員会の皆様、今日まで本当にお疲れさまでした。

ありがとうございました。

谷中川柳大会を通して、台東区の文化振興はもちろんですけれども地元の立場の違う様々な交流がこれからも生まれて、地域文化振興がますます発展していくことを、私も祈念しております。

本日は誠におめでとうございました。

谷中川柳大会（第2回）

昨年に引き続き、第二回として行われました。

台東区は、川柳発祥の地であり、谷中地域にも川柳に
まるとる史跡があります。

そんな谷中から川柳文化を発信しようという試みの一
つです。

今回、募集に際し与えられたテーマは、①「パンダ」
と②「坂」でした。直ぐ近くの上野動物園の人気者や「坂
の街」でもある谷中を通して現代社会や人生が描かれる
ことを願つての出題です。

募集期間は、令和5年10月1日から10月25日で、応
募方法は、一般的なハガキおよび地域商店街の店頭（谷
中各地協力店）などに置かれたポストとともに時代のツ
ールであるインターネットの（応募フォーム）も用いら
れ、総数5401句が集まりました。

選考にあたったのは、選考委員長として尾藤川柳があ
たり、台東区や谷中に因む地域の文化人が選考会をおこ
ないました。メンバーは、以下の通りです。

《谷中川柳大会選考会委員》

- 土居 利光（日本パンダ保護協会会長、川柳文化振興会会長）
宮本 瑞夫（宮本財団理事長）
末廣 照純（駒込学園理事長）
鎌木 啓麿（鳥越神社宮司・台東川柳人連盟理事長）
浅尾 空人（上野桜木町会会長・谷中川柳大会実行委員）
矢部 直意（台東区立上野中学校校長）
堀井 重義（台東区立谷中小学校校長）
松田 正昭（台東区立忍岡小学校校長）
小西 祐一（台東区立根岸小学校校長）
松尾 仙影（とうきょうと川柳会代表・日韓国際川柳会講師）
橋本 弘正（川柳文化振興会理事・開成高校元教諭）
岸 信正（谷中コミュニティ委員会委員長）
原田 仁教（谷中コミュニティ委員会運営委員長）
小杉美智子（上野川柳会代表）
石井 和子（台東川柳人連盟）
木村 成子（台東川柳人連盟）
尾藤 川柳（十六代川柳・川柳はいふう主宰）

【大賞】一般の部



東京 相沢二三子



坂のぼりきれば谷中の空の色

谷中川柳大賞クリスタルトロフィー
副賞・30000円

【評】坂の多い街・谷中。外から谷中に越して作者は、日ごろ行き交う谷中の坂でふと気づいた「谷中の空」。何時の間にか谷中が第二の古里としての位置づけをもったようで、坂の上に広がった谷中の空に今の自由な心が投影されました。地域の街への愛情が滲み出し、また谷中の特長を捉えた句は、多くの選者の目に留まりました。

よみせ通り賞

喜寿なんて坂の途中の一里塚

千葉 廣田 高児

谷中銀座賞表彰

パンダ去り孫を連れだす策を練る

東京 深川ハイ爺

東天紅賞

おしやべりな妻を黙らす登り坂

千葉 安田糸蜻蛉

パンダにも期限があつた。パスポート

神奈川 田村 奈翁

下谷観光連盟賞

永くあれあなたと登るこの坂よ

上野高校 サカミチコ

笹だけでどうして太るパンダたち

上野高校 カルー

爪隠し能あるパンダ昼寝する

上野高校 半夏生

わが庵は谷中坂町寺の町

東京 星野 圓舞

一時間待つて一分見るパンダ

東京 まっくん

谷中賞

ペイペイはどここのパンダと孫に聞く

東京 太田ひろみ

ありがとう言いつつ妻と老いの坂

東京 白井菜の花

「さよなら」を言ってるようなパンダの目 熊本 ひろぴー

群衆とパンダの孤独ガラス越し

愛知 日比 正三

下り坂次の世代とすれ違つ	福岡 真羽 貴子
坂途中見えぬ未来に種を蒔く	東京 松原かえる
本当の友人が待つ下り坂	愛知 さごじょう
だんだんと夕焼け映える富士見坂	東京 金 益
坂と寺猫と袈裟とがじゃれている	東京 川島 忠一
坂道に名前がつくと観光地	東京 うみきりん
坂途中ここは関所と猫二匹	東京 五木 田紘一
もう無理かいやまだ行ける男坂	東京 藤田 平和
櫻木賞	
坂道でまた会つたねと青い春	東京 好太郎くん
復興へ越えねばならぬ坂がある	東京 あさじ
引き際の美学。パンダも知っている	東京 オーヤ
芋坂のカメラ小僧が小競り合い	東京 ひでほこ
ああがり目さあがり目ぐるっと回ってパンダの目	東京 蘇我熊猫
櫻木庵賞	
白黒のツートンカラー人たらし	東京 山之内富士代
坂越えるたびに夫婦になつてゆく	埼玉 中尾 不東
令和六能登に魔坂が二つでき	東京 前田 惣一

子規が詠む月と芋坂谷中行く	埼玉 閑 人
いのちある限り坂道面白い	東京 堤 晏 ね
とつたどースマホでパンダ飼う女房	東京 ガラ系
佳作	
シャオシャオとレイレイ私キユンキユンよ	なつなつまーず
「丸くなる」パンダに学ぶ生きる術	金子ヒカル
3時間並んでパンダ見る平和	と し
グレーには投票しないパンダ好き	テクノボー
日中の友好政治家よりパンダ	菅 宏史
パンダなら好きと言つても許される	なほこ
愛嬌を。パンダに学ぶ再雇用	置 楽
癒される「食べる」と「寝る」の二刀流	スミス
センターも坂も数字もうる覚え	PONS
どの坂も必死に越えてきた昭和	ちちーぱっば
善人がなぜだか多い坂の町	へミング舞衣ウエイ
ああ青春行列。パンダ月の石	谷村 彩月
あいまいでいいじゃないかと笹を食む	ペンギン
アイライン太めパンダになつちやつた	よかよ
カンカンとランランからのパンダ愛	かぐや姫
ずるいなあ坂の途中で告られる	ふるはうず

とつたどースマホでパンダ飼う女房
 パンダさえ高齢化には逆らえず
 ゆったりとパンダリズムが似合う街
 ランランとカンカンを見たよき昭和
 依存症。パンダだらけの我がスマホ
 可愛いがパンダに似てるとは言えず
 歓声もわれ聞せずと寝るパンダ
 通じるか江戸っ子。パンダの中国語
 あの頃はもつとゆるやかだった坂
 あの坂の向こうにきつと青い鳥
 オアシスは幾つか坂を越えた先
 かじらせる脛を鍛える谷中坂
 ケセラセラどの坂道を選んでも
 この坂を登ればきつと僕になる
 人生と谷中に多し坂の道
 父母が待つ霊園までのゆるい坂
 もう傘寿意地を張らずに女坂
 下町の光が映える出世坂
 寛永寺坂の上から江戸の鐘
 坂の有る人生だからまた愉し
 坂越えるたびに夫婦になつてゆく

ガラ 系
 近藤 昭久
 陽 香
 春 爺
 白 い 鳥
 老 人 生
 う に ど ん
 チョウピン
 A k i k i
 宮下 一穂
 いわきのみっちゃん
 閑 古 爺
 大木 安沙
 南 瀬
 高梨 武州
 長本あられ
 小倉 三步
 てぬき親父
 未 生
 青メダカ
 中尾 不東

坂道を登ると見える次の坂
 桜散る声掛けじまい未練坂
 子規が詠む月と芋坂谷中行く
 上向けと坂本九に励まされ
 振り向けば街の夕映え坂の上
 キヤラ弁のパンダの顔も愛らしい
 白黒のツートンカラー人たらし
 たれパンダファンの石破氏夢つかむ
 チコちゃんもパンダに送る平和賞
 パンダからスローライフを教えられ
 メイクを落としパンダ素顔になり眠る
 メイク術。パンダにならう黄金比
 ライバルはパンダに決めた初デート
 わが子よりパンダ可愛いとも言えず
 愛らしいパンダも猫をかぶつてる
 高血圧。パンダ隠れて何食った
 川柳とパンダ発祥台東区
 他は捨てて。パンダは残すぬいぐるみ
 大谷とパンダを見れば元気出る
 中国へ。パンダの老後羨まし
 日本をやさしい顔にする。パンダ

林 山柳
 麻 裕
 閑 人
 レディ馬場
 K a z u
 野口らいら
 山之内富士代
 染川 染幸
 普川 素床
 マコツチャン
 相原あやめ
 な っ こ
 ふ ゆ み
 みなまる
 みみけい
 中年やまめ
 アルサブア
 花井多可子
 笑うガジュマル
 琥 珀
 中前 棋人

返還のパンダ見たさにソロキャンプ アイドルで有名になる坂もある あの坂に笑われぬようにスクワット いのちある限り坂道面白い いわれよし昔人のこす蛭坂 老の坂一步一步を踏みしめて この俺にまさかの坂の七曲り 転がるに早いまさかの下り坂 ひらきなおり楽しまなくちや下り坂 令和六能登に魔坂が二つでき 坂道のアイドルの顔みな同じ 上りより下りがキツイ老いの坂 地図にない坂に大きな夢をもつ 八十路坂まだ撒いてみる華の種 夫婦でも人目気になる忍坂 満月に呼ばれて坂を登り切る 老いの坂サプリの山が待っている	もふもふ 夏川涼 ミネラルおじさん 堤晏ね 寺小屋大多 稲葉浅治 愛植男 中澤仁捷 木村隆夫 前田そう一 わかち ほり・たく ふじちゃん 風間なごみ 深澤健聖 わんこなり わっしよい
---	---

外フシ

I LIKE.パンダ大谷ずんだ餅
区内では米よりパンダ合言葉
芸大に何時かパンダ科出来る夢

伊藤美沙江 近藤節子 保坂敦子

紅白のパンダも混じるクレヨン画 パンダちゃん鬼さえ食べぬ竹を食う パンダの目ニ―チエの深淵とはこれか 団欒の輪を加速するパンダの子 パンダ似の彼と人生登り坂 地図にない坂道あまた回顧録 ふんわりと童話の坂へ迷い込む 見渡す地坂が平気な頃買った 夕焼けにあぶり出される坂の街 御殿坂聖から俗へくだりゆく 坂の前ラッキー感じ無料シム 坂のまち寺とカフェとが肩組んで 「もふもふ」は定着したが去るパンダ アルバムにパンダの記憶色褪せず いつからか人間らしくなるパンダ 音がした寂し涙のパンダロス お尻まであざとかわいいパンダちゃん お湯かけてパンダに変わるうちの父 数学のノート半分パンダの画幼齋 人気者フームと去りしパンダロス パンダ笹人は竹の子舌鼓	羽生田はる 赤見静風 夏風かをる 加藤加減 みかん 島崎穂花 浅賀清 本間多美子 佐藤彰宏 野上卓 坂男 ヨウゾウ あおちゃん あー無精 やんちゃん クルシマガレ しんのすけ さおとめらんま ようさい 太田太勝 須永我柳
---	--

パンダたち子供の笑顔かつさう	しろくろ
パンダならそんな草も許せるが	ぱせり
パンダならモノクロ写真でも映える	漢方十七錠
パンダにはパンダの悩みがきつとある	めめ
パンダの目未来に光る道しるべ	空人
パンダパフェかぶりつくさままるで熊	山茶花
パンダ見て帰る子供らパンダ顔	國富昌代
パンダ見るわが子見る親なつかしく	末っ子
病室で癒やしパンダの成長記	宮本波留美
ポーナスをパンダグッズに消しとばし	パンダ好き
モノトーンなのに冷めないパンダ熱	なやなや
帰国してバイリンガルになるパンダ	多賀二郎
香香と表記で返還実感し	白黒亭熊子
写真集何回見てもパンダロス	ずっと元気でね
孫の絵にそれはパンダかシマウマか	ピアノカフェ
大役を終えたパンダに栄誉賞	星月夜
年若いパンダも僕もユーターン	ひぐらし
尾の色の白黒知らぬパンダ好き	桜坂
いにしえの恋坂遠く幻か	ボギー加藤
生まれたたのお日様に会う坂の家	穂山常男
健脚はあかぢ坂から鍛えられ	馬場のり子

この先に何があるのか男坂 つぼさん
 こんな坂芸大受験に比べれば せんふう
 坂の傘傘逆さ坂坂の傘 (回文) 林 チビ太

【総評】「パンダ」および「坂」が課題となった第2回谷中川柳大会。十七人の選者により公正に審査されました。「パンダ」からは、カンカン、ランラン以来、地元上野と深く関わり、多くの人にとって愛された対象が居なくなる寂しさのほか、パンダを通して感じた人間が映し出されました。

「坂」には、目に見える目の前の地形としての坂ばかりでなく、「人生の坂」が句に映し出され、深い句も生まれました。

たった十七音ですが、そこには作者の感動と地域への愛情もまた映し出されているのがよく解ります。

今年また、人間が映し出される川柳を愉しんで頂けたことと存じます。

受賞者の皆様、おめでとうございます。

そして沢山の句をお寄せくださった皆様には御礼を述べるとともに、この行事の成功に向けて活動してください。地域の皆様、川柳界の皆様にご心より感謝申し上げます。

【大賞】ジュニアの部



根岸小学校 河野あかり

パンダ橋友達を待つこの時間

谷中川柳ジュニア大賞クリスタルトロフィー
副賞・10000円Amazonギフト券

【評】「パンダ橋」は、上野駅上を東西に結ぶ陸橋で地域住民にとつては、無くてはならない存在。

そんな交通の要衝はまた、何気ない日常でも常に利用される。放課後であらうか、「友達を待つ」僅かな時間に感じたのは、場所柄から空の広さから青春を謳歌する作者自身だったので…。

風景に心理が重なる時、そこには詩が生まれることもある。選考会でも多くの票が集まった一句です。

いせ辰賞

初めての化粧はまるでパンダのよう
上野中 河村みづはら

谷中ヒカリ賞

あの坂で君と走った帰り道
上野中 有馬 知里

あの坂を超えたその先希望の地
上野中 牧野 翔大

長い坂登り切ったらサクラ咲く
上野中 中川 琴心

気付いたら家にあふれるパンダたち
上野中 米澤 美風

待ち合わせ君との約束「あの坂ね」
上野中 安藤 詠摩

谷中賞

受験の日人生の坂こえてやる
忍岡小 渡辺信太郎

下り坂スピード上げて駆けた夏
忍岡小 富田 英佑

休日の母のすがたはもうパンダ
根岸小 中太 幸輝

帰り道猫と目が合ったんだんご坂
谷中小 重田 望羽

パンダくろうしろすがたがパパみたい
谷中小 伊藤幸太郎

校長賞

坂道を走って下るなつかしさ
上野中 リンゴ

御殿坂光の中で桜散る
忍岡小 内藤由希菜

パンダにねなりたい私はねころぶよ
谷中小 並木 瑚夏

徒歩五分坂道なんて聞いてない
根岸小 関川 達己

佳作

中学生青春の坂上ります

一日中パンダと同じ日よつ日

動物園2時間並び初パンダ

下り坂夕日にしずむ恋心

坂くだる夕陽と私見つめ合う

太陽を追いかけていく下り坂

立ちこぎで夕日めざしてのぼった日

日が暮れてどこの坂から帰ろうか

命あるパンダのひとみ美しい

最終日パンダパンダで長い列

パンダ見ていやされてから勉強だ

パンダ見て父のせなかとつりふたつ

見たせばパンダづくしの上野駅

この坂をおりたらたぶん冬が待つ

のぼり坂友とのぼればつらくない

尾の色を確かめたくて行列へ

おもいだすパンダの写真いとおしい

行列の中で寝ているパンダ達

けいさいを支えてくれるパンダさん

坂こえてパンダに会える夢の中

上野中	大林 鷹雅
上野中	小林 悠斗
根岸小	大久保達也
根岸小	久富 淳
上野中	北川航太郎
根岸小	松本 青
上野中	クリーム
上野中	えほうまき
上野中	ソーダソース
根岸小	梅村 美怜
上野中	い も
谷中小	チェリー
谷中小	堀内 賀代
上野中	中島 桜
根岸小	松島 佳吾
忍岡小	齋藤 溪佑
根岸小	艾 子初
上野中	中島かれん
谷中小	澤辺 脩
根岸小	大照 志保

白黒でいつもまったり人気者

つらいとき心の支えパンダたち

動物園独りさびしくパンダ見る

ねころんでパンダとともにリラックス

パンダパン食べれなくなつてみつめあう

パンダ見るそして己の腹を見る

窓こしのおっさん座りパンダくん

あかじ坂のぼれば谷中みわたせる

あの坂でさいかいしようまたいつか

坂の上いつも待つてる友がいる

坂道で暑さに負ける秋の夏

坂道で独りぼっちで待つ私

坂道に町の笑顔がつまってる

坂道のいつもとなり青春が

人生は行く先々に坂がある

つらいときのぼった坂に光あり

登下校坂多すぎるマジビエン

登下校走り語つたさんさき坂

富士見坂まっかな夕日思い出す

毎日が一喜一憂坂ばかり

みあげれば大きい坂がまちぶせる

谷中小	服部芽以子
忍岡小	渡辺愛由美
忍岡小	大森 哲平
谷中小	牧野 雄人
忍岡小	鈴木あかり
上野中	小柳 慶能
上野中	鈴木 里梨
谷中小	渡邊 逞
根岸小	山本 千晴
上野中	深尾 咲
忍岡小	大澤 璃子
忍岡小	笹島 怜
根岸小	宮内 もも
上野中	ひ ぼ
上野中	増田木綿子
忍岡小	秋山 文香
根岸小	齋藤 丈真
上野中	マボどろふ
根岸小	大高 怜
根岸小	木下 晴湊
忍岡小	佐武 弥広

谷中にはあつたらいいなパンダ坂	谷中小	仲間史央里
夕焼けの急勾配をかけぬける	谷中小	まえてつ
上野ではパンダ卒業悲しいね	上野中	かにかま
がらす越し転ぶ姿も愛らしい	忍岡小	清木 陽香
転げ落ちねてるパンダに顔ゆるむ	根岸小	戸辺 美香
さようならいといしパンダ中国へ	谷中小	松橋陽奈詩
さようならシンシンリーリーインチャイナ	上野中	川瀬 莉奈
シャンシャンへわたしに笑顔ありがとう	谷中小	き こ
中国にシャンシャン帰りパンダロス	上野中	松本 春雪
動物園花よりパンダ見たかった	根岸小	代田 笑子
のんびりと過ごすパンダにのめりこみ	忍岡小	富田 英佑
パンダとの別れのしるしにぬいぐるみ	谷中小	遠山 心結
パンダにはかわいがられる職がある	谷中小	いしかわなつこ
パンダはねみんな元気にしてくれる	忍岡小	小寺 真聡
パンダファンパンダだらけでやってくる	谷中小	ま こ
ぼくのようなまけるパンダ見はなせぬ	根岸小	八桁 聖陽
リーリーとシンシン帰ってかなしいな	谷中小	須田 心菜
下り坂自分のかけを追いかける	忍岡小	田中 美紗
下り坂友と笑って帰る夜	忍岡小	大曾根久遠
坂があるくつひも結び始まった	根岸小	九石 凜乃
坂下り君と野望を語り合っ	上野中	福本 奏流

坂の上後ろ姿にほつとする	谷中小	武藤 麻希
自転車で坂を下ると青春だ	上野中	前原 帆船
清水坂弘法大師伏し拝む	根岸小	大西 百花
十二才私の坂は永遠に	根岸小	茂木 葵
人生という名の坂で立ち止まる	上野中	西 蓮花
人生は山あり谷あり坂もあり	忍岡小	三留 悠聖
のほり坂重いカバンとほちほちと	上野中	吉田 幸菜
のほり坂すすんでみたらむげん坂	谷中校	花 子
上り坂皆で走る青春を	上野中	西濱 千菜
はねている心の坂をこえてゆく	根岸小	馬 羽然
夕日さし谷中の坂がひかっている	谷中小	高野誠一郎
ろうじんは坂といっしょにとしをとる	谷中校	横澤 袖伎

外フシ

あいたいな パンダといっしょにアスレチック	谷中保	半田 真照
アイドルのパンダをみればキュンとくる	上野中	村岡 羅那
朝がたに坂をのぼればパンダめし	谷中小	フジモト
いかしの子ささたべながらこつちむく	谷中小	梶田 真子
休日にはパンダのように食べて寝る	根岸小	松崎 未来
シャンシャンの後ろ足には白い線	忍岡小	鹿島 睦
シャンシャンの写真を見て「会いたいな」	谷中小	はるみかん
人生は谷あり山ありパンダあり	根岸小	安藤 漱吉

川柳を書き思ひ出すパンダたち	谷中小	中原	未玖
動物とる画面の中にパンダがいる	忍岡小	片岡由依奈	
どこへ行く戻ってきてねりーりや	谷中小	村上	叶真
友達の愛が強すぎ。パンダたち	忍岡小	三原百々香	
夏休み花火とうつる。パンダさん	忍岡小	町田	佑真
人気者パンダのすがたあこがれる	谷中小	パンダ	
人間とパンダは同じ空の下	谷中小	山口	凌矢
パンダパン上野のおみせのおいしいな	谷中小	り	ゆう
パンダ見て比べ悩むは我が宝	上野中	安田	明航
パンダ見て元気になれたありがとう	谷中小	石本	詩乃
ふるさに帰った。パンダありがとう	根岸小	有賀	玄哲
また会おう記憶に残るパンダたち	谷中小	茂手木	佑輝
ゆうやけのパンダアートに舌つつみ	上野中	鶴巻	ゆき
別れの日向けるシャッター。パンダ達	上野中	清水	彩花
汗をふき毎日通る清水坂	忍岡小	高澤	彩良
帰り道夕暮れを見る坂の上	根岸小	渡邊	結香
風を受け坂道を漕ぐ爽快感	谷中小	横山	明日香
最近の子どもの人生坂のよう	上野中	な	べ
坂下り小学校にさよなら	忍岡小	宮寺	芳華
坂下るつめたい風と淋しさ	忍岡小	今村	俊斗
	忍岡小	駒井	葵

さがしてゐる人生の坂大変だ
 坂の上誰か誰かと待っている
 坂道を歩けば先に寺がある
 さんぎぎの坂を上って友の家
 人生のような坂道御殿坂
 人生は坂ににいてみりよくてき
 通学路いつものさかで息切らず
 東京の人生の坂を歩んでく
 なりある三段坂をおりていく
 上り坂僕の人生も上り坂
 はじまるぞ坂の集会場所谷中

根岸小 武井 柚希
 忍岡小 金子 弦生
 上野中 六 花
 谷中小 瀧 望 響子
 根岸小 浅香 正伸
 谷中小 伊藤幸太郎
 上野中 金田 幸那
 根岸小 小室 新
 根岸小 友部 翔
 谷中小 スローン・ローナン
 谷中小 増鳥香葉子

【総評】ジュニアの部も一般と同じ「パンダ」および「坂」が課題でした。
 パンダは、身近な存在であり、目が効いた作品が多くありました。「坂」は、谷中という地域性もあり、通学や日常の等身大の姿が重ねられました。中には人生を達観したような「人生の坂」をよんだ句もありました。
 川柳を通して、しっかりと対照を見据えることにより作者の視野が広がり、また深く物事を捉えるような機会にもなったようです。

選者感想

末廣 照純



審査員という立場で、最初は大変だなあと思ったのですが、皆さんの作品を拝見していて、だんだん楽しくなってきました。

いろんな感性があるなあということに感心しました。一句一句から作者

の気持ちが見え出すようで、川柳という文芸の面白さを感じました。

入選作品の披露を聴いていて、そして自分は、どの作品に一票を入れたかということを感じながら、本当に楽しい時間を過ごさせていただきました。

川柳は台東区谷中と関係が深い縁があることですので、これからも皆さま方が川柳という文化を背負っていただくというような気概で川柳にチャレンジしていただければ嬉しく思います。

一緒に地元の文化を育んでいけたら嬉しく存じます。受賞者の皆さん、おめでとうございます。

（駒込学園理事長）

地域を知り、地域を誇れる子供たちに

矢部 直意



川柳や俳句は広く社会に親しまれ、学校でも授業で俳句を学ぶ機会があります。一方川柳は、ユーモアや風刺といった内容が表現されていて、生徒にとっても親しみやすいものだと感じています。

今年の9月、校内作品展が本校で開催されました。生徒が展示する作品に、思わず「ああ、あるある」と笑ってしまうことが多々ありました。作品展に出品されたもので、いつまでも耳朶に残っていて、一人で思い出し笑いをして周囲に恥ずかしい思いをしたものがあります。

「セミと母 双子のように 口うるさい」。情景が思い浮かび、微笑ましくなります。生徒の率直な思いを読んだ感じがよく出ていて、それらが見る人の感性に響いているのだと思います。川柳の素敵な魅力を感じる次第です。

今回の谷中川柳大会では、一般の部もジュニアの部も『坂』あるいは『ハンダ』が課題ということでした。本校にとってもこのような機会は、地域を知り、地域を誇

れる生徒の育成に結びつくと考えています。今後も更に子どもたちの成長に繋がる川柳大会になることを大いに期待しております。

(台東区立上野中学校・校長)

魅力あるまち 谷中

堀井 重義

谷中川柳の選考委員として声をかけていただき、感謝

申し上げます。また、本校の子どもたちにもこのような機会をいただき、ありがとうございます。



本校では3年生以上が参加し、思い思いの情景や心情などを川柳に表していました。ちやうど3年生が総合的な学習の時間に「谷中の坂」をテーマに学習を進めていました。「谷中の坂」のよさをアピールしようといういろいろと調べ、まとめたところでした。

今回、選考委員として多くの川柳を読ませていただきました。「坂」や「パンダ」に対するそれぞれの思いや人間模様、そして情景がすぐに浮かんでくるほどの素敵な表現、思わず微笑んでしまう作品など、委員としての立

場を忘れ、一読者として楽しませていただきました。同時に、谷中の町の素敵さ、そしてこの地に小学校がある素晴らしさを改めて感じるときでもありました。

今後も川柳を通して、大会がますます発展されることと、谷中の町の魅力が多くの方々に伝わることを願っています。

(台東区立谷中小学校校長)

川柳から子供たちの思いを感じて 松田 正昭



台東川柳人連盟からお声をかけていただき、本校は五・六年生が初めて谷中川柳大会に参加しました。この度、地域の皆様からこのような貴重な機会をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

上野中学校、谷中小学校、根岸小学校、忍岡小学校のジュニアの部に応募された子供たちの川柳を読んでみますと、「なるほど」「そんな見方があるのか」などと感心する作品ばかりでした。子供たちは、感受性が強く、敏感で繊細で正直です。私たち大人が普段何気なく過ごしている世界は、子供たちにと

つては、思いや考えを深める場であり、様々な経験をとおして成長していく場です。短い十七音による川柳ですが、そこには、自分なりの見方で自分の思いを素直に精いつばい表現した姿が凝縮されています。

これからも川柳を通じて、子供たちが地域への愛着と誇りを深めるとともに、自分のよさや成長を実感することができればと願っています。

(台東区立忍岡小学校 校長)

暮らしの中に川柳を

小西 祐一



第2回谷中川柳大会が、多くの皆様にご参加いただき、盛大に開催されました。ことを心よりお慶び申し上げます。

川柳は、日々の暮らしの中にあるさりげない発見や驚き、心にしみる一言、微笑ましいエピソードを、わずか十七文字で表してしまおうという粋なわざです。そのような文化が途絶えることなく、むしろ全国に広がりを見せ、親しみとともに誰もが知る我が国の大

切な文化の一つとして生き続けていることはとても喜ばしいことです。

このたび、第2回谷中川柳大会に選者として参加させていただき、川柳の素晴らしさや奥深さを感じています。また、子供たちの率直で素直な感性が川柳を通して表されたときに、忘れていた感覚を思い出させてくれるような懐かしさとともに感動を味わわせていただきました。

川柳発祥の地である台東区において、このような会を開催できますことを誇りに思います。今後さらに発展されますことを祈念いたしますとともに、川柳がより身近なものとして、私たちの暮らしの中に生き続けますことを願っております。

(台東区立根岸小学校 校長)

選評

橋本 弘正



上野の台地と本郷台地の間に広がる谷中は、西に行っても東に行っても坂にぶつかると、まさに坂の町である。

そこはまた寺が多く、見上げる空は広い。空は刻々に変化し、人々はそ

の情景に親しみつつ時を過ごす。大賞の

坂のぼりきれば谷中の空の色

は、そうした情景をさりげなく描いている。またジュニア部門の大賞

パンダ橋友達を待つこの時間

にも上野谷中の空間の大きさが示されている。谷中の老少の人が共に谷中の空間に親しんでいる事が印象的である。今回は、忍岡小、谷中小、根岸小、上野中が学校参加され、各賞の優秀作品に校長賞授与された。他の地域ではあり得ない事柄であり、谷中川柳大会の特徴の一つになっている事を喜ぶたい。

(川柳文化振興会理事・元開成高校教諭)

選評

岸 信正

谷中の街は皆様をお待ちいたしております。

第2回や中川柳大会の成功をお慶び申し上げます。

諸先生方、経済的支援を賜った協賛者の皆様参加された全国の投句者



の皆様は御礼を申し上げます。

台東区発祥の川柳が多くの人々の心を掴み、ぎすぎすした世相を和らげ、また励ましてくれている事に希望を感じました。

そして、小中高の子供たちの感性に脱帽です。

コロナ後の新時代を逞しく頑張ろうではありませんか。これからも谷中の街と風情、そしてそこで頑張る私ども街の人をよろしく願います。

お待ちしております。

(谷中コミュニティ委員会委員長)

谷中川柳大会を振り返って

原田 仁教

谷中川柳大会も2年目を迎えることができました。

第1回は、3000句も集まれば良いかと思いましたが5000句を超える句が集まり、今回の2回目も5000句を超える句が集ま

りました。

谷中川柳大会を開催して、特にこどもたちの句を見て、



いつも驚かされます。

特に教える事もなく、自由な川柳を創作してくる。

真つ直ぐな目で見た物を、そのまま川柳に表現してくる作品はどれも素晴らしく、甲乙つけがたい限りです。

私自身、川柳に関わったのは昨年の谷中川柳大会からで、特に川柳を習った訳ではありません。

選考委員に選ばれたのは、かえって川柳について知識を持たないからだだったと思います。そのような私ですから「この句は素晴らしい!!」と思える作品がたくさんあります。

俳句などと違って、川柳は誰でも気軽に自由によむことが出来る点が、子供たちにはとても馴染むのだと思います。

小中学校の先生方も応援していただけて居りますので、これからもますます裾野を広げて頂きたいと思えます。

(谷中コミュニティ委員会運営委員長)

第2回谷中川柳審査評

松尾 仙影

一般の部とジュニアの部とを、各選者が選ぶその合点から、再度、入賞作品への審査会がおこなわれました。

かつて、作家の故・田辺聖子さんは、川柳コンクール

とは？に言っていました「文芸の入選作なんて『お祭り』のお神輿役みたいなものなのよ！ みんなが、お祭りをにぎやかにしあうために、どれかの作品、誰かの作品にスポットの光を当てる役だけなのよ。落選したからってその作品がダメとかいうものじゃないのよ」と。

今回のお祭りは、全国あるいは世界中の人々に、「東京の谷中の存在を知ってもらおう！」ということ。〈谷中



ってどういうところ？〉
行ってみよう・・・という
期待感、同じ台東区に住
んでいてよかったね！
という連帯感を、生み出
すお祭りに、協力しあえ
てありがとう！という
こと。今回は、あなたの句がスポットライトをあびるかもね。
(ととろきょうと川柳会代表)

選后感

小杉美智子

「谷中の空の色」「ゆつたりとパンダリズム」には負けました。谷中愛に満ちています。

「坂の途中」に励まされ、「引き際の美学」には、ドキ



ッ。「どの坂も必死に越えてきた昭和」へは共感です。

大晦日には「江戸の鐘」に酔いしれましょう。

ジュニアの皆さんの感性にもほろり。パンダに癒され、励まされます。

坂を上げれば「希望」「夢」「光り」を感じ、友達が居れば辛くないと…。

下り坂を掛けた青春。生き生きしていますね。貴方は独りぼっちではありません。小学校の皆さん「いいね！」楽しく選をさせて頂きました。（川柳うえの会長）

パンダと坂

第2回大会は、参加小中学校の数も増え、ジュニア部

門も厳しい戦いになりました。

パンダの中国返還ということで、私も直前に雨の中を2時間並んで1分のお別れをしました。



石井 和子

ジュニアの目もさようならも言っているようだとか、初めての化粧がパンダのようだなど楽しい句がたくさんありました。

大賞には、「パンダ橋」上で大空のもと友を待つ思いの溢れる素晴らしい句が選ばれました。

また、坂町の谷中で日常的に上り下りしている中、時として登り切った際に感じた街と自分の関係が開けた大空に投影された句が大賞になりました。

そこに地元愛が重なって感じられ、いかにも川柳らしさを感じました。（台東川柳人連盟）

谷中川柳大会に参加して

谷第2回川柳大会おめでとうございます。

木村 成子



前回にも増して参加者、投句、スポンサーも増えてご協力と興味を持って頂ける方がたが増えた事は、本当に喜ばしい事と存じます。

私は、日々の生活の中で川柳的に物事をとらえユーモアを持って暮らすことは、

生活が楽しく豊かになるのではと思っております。

江戸文化の名残を残す谷中の地、この恵まれた環境を生かして川柳文化が益々盛んになることを祈念すると共に「継続は力なり」これからも谷中川柳大会が未長く発展する事を願っております。

(台東川柳人連盟)

講評の大切さを実感させる句たち 土居 利光



だから、モノを見て、あるいはモノを心に描いて、そのモノを表現しようとするならば、その表現されたモノは見るといった行為をする主体の世界観を反映している。つまり、どのようなモノであれ、それを世に出すことは、そのモノを通して作り手が価値を思っていることを伝えようとしていることに他ならない。このことは、特に芸

術、美術作品と総称されるモノに顕著に現われる。川柳もその例外ではない。

言葉によって主体の世界観を伝える際、最も核となるのが世の中に対する直観である。直観へのアプローチと表出、これは脳世界における自己対話とも言えるだろう。この内部の対話の結論、つまり作品は外に出た途端に作家と鑑賞者との対話となるが、両者が共通の脳世界を持っていないと対話が成立しない。川柳によく冠される滑稽・諷刺・笑い・気づきの効果とは、「違うんじゃないの、という警鐘」、つまり作者たちの集合的な時代の記憶として信じられている当たり前さ、これに対する疑問符・感嘆符を心に生み出すことである。これは、脳世界における対話における結果として起こる一種の刺激ということだと思ふ。こうしたことについても、共通の脳世界で対話しているから成り立つのである。

対話を機能的に貫徹させようとする仕組みが作品の表現技巧である。疑問符・感嘆符を生み出すためには、例えば理路整然とした表現では効果が薄い。ハッと気がつくような意外性をもって表出することが大事であり、そのための表現技法なのであろう。こうしたことを突き合わせて考えてみると、川柳を講評するとは、作者が伝え

ようとして、価値観を掴むとともに、それを時代背景や動静といった社会的価値意識という土台上で比較することにより、共感性を評価することである。この評価の際に重要なのは、意外性を持った表現であり、共感を誘う機知、はっと気づくような面白さといったような表現技巧である。

要するに講評の要点は、上手く伝える技術がしっかりと置いて、心に響くかということになりそうだ。そして、心に響くことを多くの人々の脳世界において引き起こすことが重要なことになってくる。しかし、モノを見るといった行為が見る主体の世界観を反映しているとすれば、多くの人々に共通する世界観が均一に存在する訳ではない。ここに講評のもう一つの意義がある。それは作者の意図をより明確に位置付けることであり、作者の持つ世界観という視点を異なる方法で提示することである。つまり、講評とは作品を評価するだけでなく、その作品に多くの人々を引き込んでいく方法の一つとも言えよう。逆に言えば、そうした世界に多くの人を引き込むことが講評の役割であり、講評者の立場なのである。つきつめると、講評とは、講評する行為だけで成立するものではなく、場や時間の流れを考慮した総合的な仕掛

けなのであろう。

課題となった「パンダ」を考えてみると、パンダといえば「カワイイ」という言葉がすぐに浮かんでくるように、パンダに対する見方は定着しているといつてよい。

この見方をどのように捉えていくか、そこに課題の意図があろう。

「群集とパンダの孤独ガラス越し」という句を例として挙げたい。この句を詠んで、すぐに半世紀以上に翻訳・出版されたリースマンの「孤独な群集」という本を思い出した。若く多感な時期でもあり、エーリツヒ・フロムの「愛すること」とともに強く印象に残っている。リースマンが説くのは、誤りを恐れずに一言でいえば、消費社会における他人指向型の人々、それは他人の期待や規範に同調するように暮らし方をしている人々であるが、こうした社会的な生活態度を持つようになるというものである。古典とはいえ、この指摘は現在でも当てはまる。我々はパンダを見に行く。それはパンダが好きだからか、好きと思わされているのか、それはカワイイさに癒されたいのか、カワイイと思わされているのか、また、子に誘われてなのか、子を誘うことが良いと思わされているのか、その是非は問われない。行きたい

人は、行けば安心するのである。そこには人それぞれの孤独な眼がある。

パンダは単独行動する動物であり、野生では全くと言っていいほどに人に会うことはない。動物園で人が見えても、パンダにとって人とは安全なただの風景であるに違いない。人社会における「観る」という文化の中にあつてはパンダも孤独なのである。お互いの孤独が透明であるガラスによって隔たれている。それは鏡ではないため自己が投影されることはなく、互いに心が通つていくような様相を呈する。これが現代という社会の縮図であらう。古典といふべき名著を思ふ浮かべることがなければ、これまで述べてきたようなことも考えなかつたかもしれない。また、この句によって過去の事績に負うことも多い漢詩が頭に浮かぶ。かくして、想像を掻き立てる「群集とパンダの孤独ガラス越し」を評価した。

「パンダ橋友達を待つこの時間」は、パンダの持つ記号性、それも良いイメージを持つ記号性を良く表現している。「ペイペイはどここのパンダと孫に聞く」は、時機を得た面白さが溢れている。こうした句にも惹かれる。どちらにせよ、動物としてのパンダそのものに対する句というよりは、パンダが社会的に持つ性格や位置づけなど

に関する句なのである。集会的な記憶として時代的に信じられている当たり前さを、大なり小なり崩すことによつて、気付きを与えていることが興味を惹かれる因であらう。

課題の「坂」について考えると、坂には、実際の坂のことを指すことも、区切りとしての意味を表わすこともある。そうしたなかで「坂のぼりきれば谷中の空の色」は作者の持つ谷中のイメージがきれいに纏められているとともに、人生の境としての坂を暗に示すような情感もあると思う。実は、今回の講評を機として「孤独な群集」を本棚に探したが見つからない。処分してしまったのだろうか。処分の記憶にないのは歳のためとも思う。とはいえ、本の存在を思い出せたことで、かつての心のトキメキが甦り、気持ち晴れやかになった。自分は歳という坂をまだ登っているのだろうか、空を見上げる余裕もでてきたのかもしれない。今回の句会によつて新たな発見をした。講評をすることは楽しく、句の意義を新たに作る、ということである。



選考をおわって

尾藤 川柳



第2回谷中川柳大会には、たくさんの作品を頂き有難く嬉しく存じます。投句の皆様には感謝いたしますとともに、川柳を地域文化として温かく接していただきました選考の皆様準備から広報、賞品の発送などまでたいへんな運営をいただいた実行委員の皆様、さらに大会当日の作業を手分けしてくださったスタッフの皆様には感謝申し上げます。

谷中川柳大会の特長は、地域発祥の文化としての川柳が、生きた文芸として地域の作家を中心によまれているということでしょう。

大賞は、まさに地域愛を彷彿とする作品であり、もとよりジュニアは、地域の生徒さんらの描く世界でした。いずれも作者自身の心理が十七音に投影され、この地域に生きることの感動が、言外に表現されました。

僅か十七音しかない川柳の形式にコトバとコトバの関係を見事に持ち込んで、みごとに膨らむ表現を見せてくれました。

今日、川柳は日本語の文化圏に広く楽しまれ、海を越えてロサンゼルスや台湾の作者の投句もありました。260年ほど前のこの地域に始まった文芸の拡がりがあります。

川柳は、誤解されて「川柳は、俳句と違い何でもあり」と字余りや非定型も関係なしのように扱われたり、「川柳は俳句の可笑しいヤツ」とか「ふざけた俳句」などとして、浅いクスグリの笑いが川柳のように思われたりします。酷いものになると「俳句は上品だが川柳は下品だ」などと悪口を叩かれたりもします。

しかし、川柳は伝統文芸であり、俳句同様「十七音定型」という器があります。また、笑いに關しても、おふざけやクスグリの笑いもあるでしょうが、作者自身の内なる自嘲や深く社会を見通した諷刺の笑い、笑うしかなくなってしまった瞬間の人生などもあります。

川柳は俳句のように自然や四季、物などを通して描く挨拶の句とは異なり、ニンゲンを直接見つめ直接描きます。ニンゲン存在の中には、高尚な部分もありますが、当然下品な部分もあります。

逆に人間にとって身近なその部分こそが、川柳の魅力ではないでしょうか。

谷中川柳大会 披講と表彰式

谷中川柳大会の披講と表彰式は、11月23日、谷中防災コミュニティセンターホールにて開催されました。

会場に集まったのは、受賞者とその関係者、来賓、選者、運営のスタッフなど150名。これとは別に、Web中継が行われ入選発表の披講を待ちました。

開会はお馴染みになった歌い手、MC、バイク乗り、池の本和美さんの「東京ラブソング」の熱唱から始ま



オープニング歌謡



会場を埋め尽くし受賞者、参加者

る。3番は替え歌で、谷中の風情が織り込まれ会場が湧いた。

歌い終わった池の本さんの開会宣言。

まず主催者を代表して当会の実行委員長であり上野桜木町

会の浅尾空人氏、続いて共催の一般社団

法人川柳文化振興会会長の土居利光氏、

台東川柳人連盟会長の鏑木啓磨、越神社宮司が挨拶。谷

中において川柳大会を開いた意義や台東区と川柳の結びつきについて語られました。

つづいて来賓の祝辞は、衆議院議員・辻清人氏が壇上

に上がり地域文化の活用を語り、次に都議会議員・保坂まさひろ氏、台東区議会議長・高森喜美子氏、同副議長

の小坂よしひさ氏、さいごに台東区議会議員の中村謙治郎氏がそれぞれ受賞者への祝福や谷中川柳界への思い、川柳の文化について語りました。



式典に続いていよいよ入選句の披講です。江戸の「開キ（ひらき）」すなわち入選発表が古式に則り再現されました。宗匠は、文台（伝統的な文机で宗匠として立机（りつき）を許された際に師から贈られるものです）を前に端座し、文台（宗匠を補佐する役割も文台と呼びます）が脇に控えます。

まずジュニアの部では、台東川柳人連盟の石井和子氏が宗匠役として、木村成子氏が文台役として登壇しました。ここからは、文台の進行で披講（ひこう）が進みます。

宗匠により句が披講（入選作品が読み上げ）されると、作品の主が会場から名乗りを上げます。これを「呼名（こめい）」といいます。その作者名を文台が復唱し、これが一句の披講です。

佳作から各賞に披講が進むと、呼名にも慣れて会場から大きな発声が聞えます。



会場の大きなスクリーンには、受賞句が映し出され、視覚的にも気分が高まります。

ジュニアの部では、いかにも等身大の可愛らしい内容の作品もあり、あちらこちらで笑みがこぼれ、時には「うまい」などと声が上がっています。

ジュニアの大賞

パンダ橋友達を待つこの時間

が読み上げられると、一気に会場のテンションが高まります。

「根岸小学校 河野あかり」という呼名が挙がり、会場は大拍手に包まれました。

石井宗匠による句評が行われ、静かに緞帳が下ろされました。

一般の部では、十六代・尾藤川柳氏が袴姿で登場。文台を華やかな和服の池の本和美氏が務めました。その奥には、初代川柳の肖像も見守っています。

「まずは前拔（まえばき）櫻木庵賞（さくらぎい）」という声を皮切りにスタート。「前拔」とは、佳作の古い呼び方の一つです。

披講は、一句一句調子を変え、句が生き生き聞えるように読み進められました。

前抜きから各賞へ。しだいに高揚感が満ちて参ります。

〈やなか銀座賞〉、〈よみせ通り賞〉は、地域からの協賛です。多くの協力を得て、この大会は成り立っている事が解ります。

「さて、これより大賞句でござい」という文台の聲が会場に渡ります。

坂のぼりきれば谷中の空の色

一瞬間があつて、「相沢三三子」の呼名がありました。拍手が沸き起こります。すると宗匠が、

坂のぼりきれば谷中の空の色

と二講いたします。文

台の「東京都・相沢三三子」の復唱が行われ、大賞句が発表されました。

受賞句の選評のごとく句評が行われ、もう一度句意を噛み締めます。

ここで、大賞受賞者には、選考委員長を務めた



奥抜楽巻による〈巻〉の授与



ジュニアの部表彰式



選者席。多くの選者の総意が受賞句にのっています

尾藤川柳氏より伝統に従って「奥抜楽巻(おくぬきらつかん)」の名譽が与えられました。授けられたのは「巻(まき)」とよばれる書付で、宗匠としての作法によつて認められた直筆の入選句集です。一回の開キに1冊しか作られない巻を手にかけることが、当時の川柳作者の名譽とされました。川柳史料の中にも歴代川柳の巻が見られますが、ここに新しい巻が付け加えられました。

つづく表彰式では、披講の興奮が冷めやらぬ中で厳かに行われました。

ジュニアの部では、参加された各校の校長先生に



よって賞の授与が行われます。

佳作、校長賞、各賞ごとに登壇

上野中学校は、矢部校長先生、谷

中小学校は、堀井校長先生、忍岡

小学校は、松田校長先生、根岸小

学校は小西校長先生から表彰状

の授与と記念品の贈呈が行われ

ました。

表彰後、校長先生を囲んでの記

念写真が撮られていましたが、そ

れぞれ生徒の輝く笑顔が印象的

です。

一般の部の表彰は、主催者を代

表して浅尾空人氏の手から表彰

状と記念品が手渡されました。

それぞれの受賞句は、10ペー

ジからの発表の通りです。

大賞は、ずっしりと重いクリス

タルトロフィが授与されました、

トロフィイの輝きが受賞者の気

持ちを代弁しているようです。



これを機に更に川柳への精進
を思った人も居たでしょうし、

またジュニアの皆さんにとつて

は、川柳という地元文化の深さ

と楽しみに触れ、川柳への愛着

も深くしてくれたことでしょう。

受賞者全員での記念写真にも

その思いが溢れているように見

えました。

会は、谷中川柳大会実行委員

会総務局長・保坂三蔵の閉会の

辞で幕を閉じましたが、二回目

となる谷中川柳大会の意義が語

られ、これからの川柳文化普及

と地域の結びつきについての一

歩がかたられました。

場を去る方々に、これも江戸

の川柳発表を模した「曆摺(こよ

みずり)入選発表印刷物」が配布さ

れ、行事を通じて伝統ある川柳

文化が、いまでも継承されている



すべての行事を終えて記念写真



保坂局長閉会の辞とMCの二人



事を目の当たりにしました。

さいごに谷中川柳大会開催に当たっては、この舞台に上がったメンバーばかりでなく、地元の皆様の協力によってポスターの掲示ややチラシの配布といった広報に尽品や作家の整理をしてくださった方や運営の資金集め、後援の取得などに奔走してくださった方々、その思いに込められてくださった地元企業の皆様、学校ごと丸ごと生徒の投句に協力してくださった皆様、さら付や表彰補助、関連設備の準備や設置に協力してくださった方、海外とまで結ぶWeb中継の操作に携わってくれた地域の皆様そして川柳の仲間に感謝致します。

谷中川柳大会の成功は、川柳を思う心、地域を思う無償の心がひとつになって生まれた成果であったと思います。全ての皆様に心より御礼申し上げます。

谷中川柳大会を終えて

谷中川柳大会実行委員会総務局長

保坂 二歳



このたびは、昨年に引き続き第2回の谷中川柳大会を開催することができました。これも一重に地域町の皆様、参加各校の皆様、そして運営に当たった川柳文化振興会、台東川柳人連盟はじめとする川柳家諸氏、そして投句参加してくださった皆様の熱意のお蔭と心より感謝申し上げます。

昨年の実績により、今年はある程度の準備も出来ましたが、終わってみればまだまだ足りないところもあると感じ、次の開催に向けて、より良くしていくべく、また経験値をつむことができました。ここにもまた感謝申し上げる次第です。

台東区には、多くの文化、歴史があり、川柳もまたその一つという事で、行政面では、ワンオブゼムの扱いと

なっておりますが、川柳は、まさにこの地で発祥した文化で、今日日本全国に広まった短歌、俳句とならぶ短詩文芸です。

その文化的裏付けとなるものが、川柳史料です。俳句短歌では、充実した文学館や記念館が多く存在しますが、こと川柳を振り返りますと、まったく顧みて来られなかった歴史を淋しく思うばかりです。

有難いことに、十六代が収集した川柳史料は、唯一無二の存在で、これにより川柳260年を通観する裏付けがここにあります。これを大切にして地域の財産とすることが、地域を愛し、誇りをもって生きてきた私どもの思いと重なって参ります。

谷中川柳大会は、地域に川柳という文化を知って頂く一つの契機ですが、その開催によってジュニアも含めた新しい文化の波が創造されました。

また来年も、この文化の波を大きく広げ、川柳を通して地域の交流を深め、そこに暮らす方々の喜びの一つに育てていけるよう、努力してまいりたいと思います。

どうか、地元発祥の文芸、文化に誇りと愛情を寄せて頂き、この地域ならではの、文化を気付いていくことにお力添えをお願い申し上げます。

第2回谷中川柳大会を振り返って

谷中川柳大会実行委員会事務局長

芹澤 幸雄



多数のお手伝いの皆様のお陰をもちまして昨年に増して多数の応募があり、募集期間が短いにも関わらず盛会に出来ましたこと、感謝申し上げます。選考委員の皆様、そして忙しいにもかかわらず実行委員の皆様、当日スタッフの皆様、本当にありがとうございました。

発表当日は、辻代議士をはじめとして多くの先生方の祝辞があり、会の重みが増しました。

何を差し置いても参加した小中学生の子供たちが来た時は、どこか不安げな顔でしたが、授賞式後の帰る時分には、みな目がキラキラと輝く表情、嬉しかったです。

この大会が続けば、地域の方のもとより、ジュニアが育ち、川柳がこの台東に根付き、将来大きな流れになることを期待して……。

第2回谷中川柳大会 会報

〔非売品〕

発行日 令和6年12月25日発行

発行人 鏑木 啓磨

発行所 台東川柳人連盟

東京都台東区池之端2-5-36-3

☎ 03-3823-9501

制作 玄武堂 企画

東京都北区栄町38-2

☎ 03-3913-0075

編集委員 芹澤 幸雄

尾藤 衡己

協賛御礼

ありがとうございました



0 100 200 (m)



① 阿部建設

② 和泉石材

③ いせ辰

④ 上野桜木町会

● 上野川柳会

⑤ 越後屋

⑥ 勝太郎

⑦ 金吉園

● 下谷観光連盟

⑧ スワン社

⑨ 千駄木腰塚

⑩ 川柳文化振興会

● 川柳マガジン

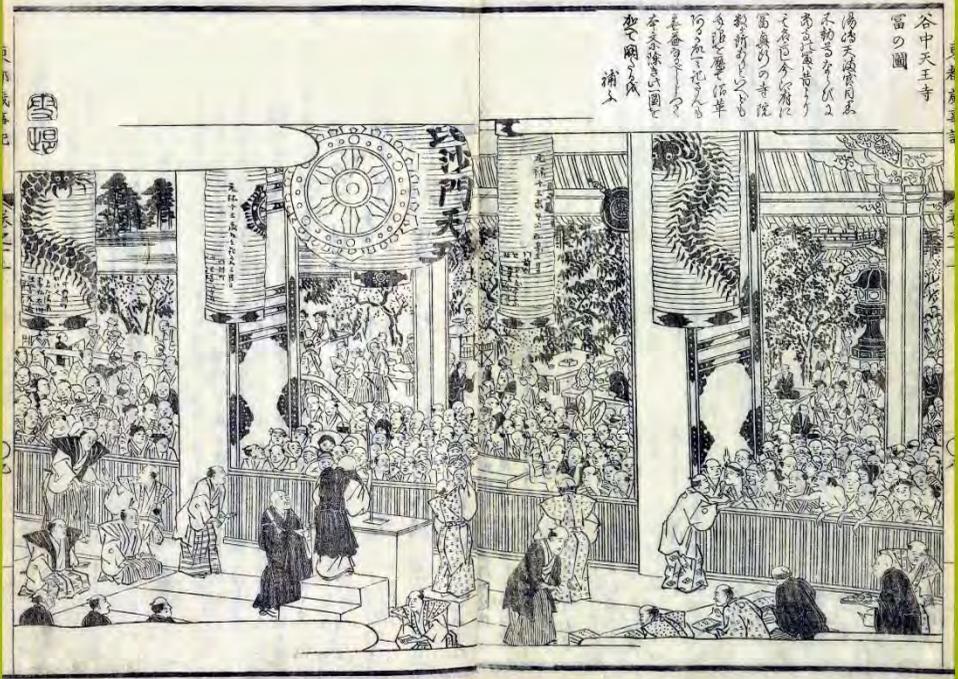
⑪ 一寸亭

坪井建築 12
鳥越神社 ●
中野屋 13
日本美術商事 14
乃池 15
花重 16
原田建設不動産 17
ひみつ堂 18
谷中ぎんざ商店街 19
谷中せんべい 20
谷中田美術 21
よみせ通り商栄会 22
日蓮宗 龍泉寺 23
和栗や 24



谷中天王寺
雷の圖

佛の天降るを以て
不動なるを以て
あるは雷は雷なり
と云ふに今に於て
富貴のの寺院
料簡のしども
多しを懸け
あるは雷なり
と云ふに今に於て
富貴のの寺院
料簡のしども
多しを懸け
あるは雷なり
と云ふに今に於て
富貴のの寺院
料簡のしども
多しを懸け



〔江戸歳事記〕 「谷中天王寺富の圖」〔国立国会図書館蔵〕

江戸川柳に見られる「谷中」①
川柳にこんな句があります。

谷中道にこりにこりと十九日 柳雨 樽57

谷中・感応寺（現天王寺）の富籤に当たった「ニコリニコリ」でしょう。その富突の日は、19日であったことが句から伺われます。きつとこの日には、図のように多くの人が集まり、賑わいを見せていたことでしょう。

この句は、文化8年（1811）のもので、二世川柳の時代です。感応寺の富籤を読んだ句には、

感応寺つきべりが先ツ一割立チ 柳雨 樽11

というものもあります。一番富の〈百両〉が当たると、その内20両は、お寺への寄進で、手取りは80両ということを読んだ句。これは、安永元年（1772）初代川柳時代に作られたものですが、作者を見ると「柳雨」と同じ作者。川柳も富籤も40年のベテランのようです。

富札は、1枚1朱から1分（1両の4分の1）。今の宝くじから比べたら、100倍ほどの値段です。庶民にとって、高嶺の花。一か八か、富籤に人生を預けてしまつと、首くくりとみの札などもつてゐる

樽5

の始末になってしまふ事もあったようです。川柳からその時代の風俗を見つけることが出来ますね。